

Alert 25号

反天皇制運動

[通巻 407 号]

2018 年
7 月 10 日発行

第 25 期・反天皇制運動連絡会

- 今月の Alert**
- 「天皇代替わり」騒動はまっぴらだ！ 7・21「なぜ元号はいらぬか」集会へ！——*2
 - 反天ジャーナル** ●——ラディカル・文平、トメ吉、橙*3
 - 状況批評** ●象徴天皇制こそ倫理的頹廢の根源——彦坂諦*4
 - ネットワーク** ●明治公園のオリンピックによる追い出しを許さない！——国賠訴訟提起！——首藤久美子*7
 - 紹介** ●2020 オリンピックに抵抗するためのパンフレット集——宮田仁*8
 - 太田昌国のみたび夢は夜ひらく(98)**
 - 「貧しい」現実を「豊かに」解き放つ想像力——太田昌国*9
 - 首都圏原発「東海第2」再稼働・オリンピック・「生前退位」——〈壊憲天皇明仁〉その22——天野恵一*10
 - 野次馬日誌***11 集会の真相*13 学習会報告*15
 - 反天日誌***16 集会情報*16

「ヨイヤサッ！ ヨイヤサッ！」

春と秋の例大祭の日には、このかけ声が町内に響きわたる。法被姿に粋やいなせなどの形容詞がくつつくが、つい「そうかね〜？」と意地悪な感情が湧く私である。ほんの数年前、路地から突然、法被姿にふんどしから陰毛がはみ出ている数人の男性が表れた時は、心底恐ろしかった。なんで祭りだとこんな猥褻な姿で闊歩することが許されるのか。悲しく腹立たしい思いをしたが、さすがに最近はそれはなくなったようだ。

ところで神輿は、担ぎ手のネットワークがあるらしく、地元住民とは関係ない人々で大いに盛り上がっている。市ヶ谷に近い地区では、自衛隊員が担ぎにくらしい。気がつくとも自衛隊は町内会と仲良し。

まあそんなこんなで祭りは二日間に渡り、一日中路地から路地を練り歩くのだ。通りのあちこちで神輿の担ぎ手をねぎらうビールだの、お酒だのがずらりと並んだテーブルが用意されている。随所で水分（アルコール）補給をし、かけ声とともに高揚していくのだ。

夜の十時頃まで、これでもかと「ヨイヤサッ！ ヨイヤサッ！」の大合唱。マンションが立ち並ぶ路地ではかけ声はビルに反響し大音量。声がかき消されないよう指示者はトラメ使用。しつこいけど、時間は夜の十時です。

と前振りが長くなったが、本題は新宿区が「騒音」を理由にデモ出発の公園使用の規制強化をしたことについて怒っている！ということ。

周辺住民からデモ制限の要望書が提出されたという。それを議会にかけることなく関係部署で協議し、部長決裁で使用基準を見直し、使用できる出発公園を四つから一つにしてしまった。区みどり土木部田中孝光部長は「私自身、住んでいる家の近くの公園に警察がしょっちゅう来て、デモがあるのは嫌だ」と答弁。部長、仲間うちのおしゃべりであんたの気持ちを聞いているんじゃないんだよ！

「神輿」も「民主主義が根づかない」のも、日本の伝統ですか？！
(桃色鰐)



250 円

- 定期購読をお願いします（送料共年間4000円）
- 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net
- 最新情報はこちら ▶ <http://www.ten-no.net/>

今月の

Alert

「天皇代替わり」騒動はまっぴらだ!

7.21「なぜ元号はいらないか」集会へ!



連日の猛暑レポートが続いていた六月九日、天皇・皇后は南相馬市で開催された天皇三大行事の一つである全国植樹祭出席のために福島入りした。式典会場は津波被害に遭った沿岸部の海岸防災林整備地。天皇の植樹に意味を持たせるにふさわしい場所ということか。県の実行委公式サイトでは以下のように述べている。

「福島県で開催する全国植樹祭は、本県の森林再生の取組の目標とするとともに、国内外からの復興支援への感謝の気持ちを広く発信するシンボル事業とすることを観点に検討し、東日本大震災による津波被災地であり、参加者に地域の復旧の状況を見ていただくことができる場所とした」と。「復興」植樹祭……。住民の、あるいはそこに住めなくなった住民のための行政であれば、やるべきことは他に山積しているはずだ。何のために福島県はこんなことに金やエネルギーを使わなくてはならないのか。そして天皇は例年どおり、植樹祭出席のほか、いくつかの視察や慰問もこなし、当地の人々を忙しく動員させている。

九日にはいわき市で避難生活が続ける被災者と面会し、植樹祭当日の一〇日は会場への移動中、雨の帰還困難区域を車で通り抜け、途中の料金所で、動員されたのであろう地元の人々と懇談したりしている。夜は宿泊先近くの公園で「提灯奉迎」。天皇たちもペランダから提灯を揺らして応えたとか。そして最終日の一日、相馬市で慰霊碑に献花、水産物の地方卸売市場を訪問などしている。

大地震・津波と原発事故によって被災した

人々を、救うことなく黙らせる天皇たちの力を最大限利用する行政と、人の心までも動員するに見える天皇・皇后のこういった行為に對して、うまく的を射た簡潔でインパクトのある批判の言葉をすぐにでも見つけ出したい。ともに考えて欲しい。

天皇の福島訪問と植樹祭については新聞・ネット上でそれなりに報道されていたが、どれも「天皇にとつては最後」「来年は皇太子」等の文言付きだ。「生前退位」とは、こうやって次の天皇制、すなわち天皇制の持続を連想させるものであることに、いまさらながら気づく。

福島訪問から約二週間後の七月二日、天皇は脳貧血でしばらく安静という記事が流れる。すぐに「症状安定」の報道に変わるが、おそらくしばらくは、「あの年齢と体力でよくやっていらつしやる」といった同情や「崇敬」の念をないませの声がつくられ、一方では、天皇自身がつくり出した、年齢や体調に左右されず、常にりっぱに「公務」を果たす象徴天皇像と、それによつて成立した「生前退位」が再度意識される状況がつくられるのだろう。どのような状況でも、いまのところ天皇の思い通りに事態は動き、株は上がるばかりに見える。回り始めると止まらない一つのサイクルが動き出しているかのようだ。

しかし、天皇の不調報道に、ここきて「生前退位」あいならぬか? と考えたのは私たちばかりではないはずだ。その後の天皇の体調についても、ごく一部の者だけが知りうるだけで、事態はいつも不確定なものとして現

象しているのだ。ただ、どうであれ、代替わりまであと長くても一年足らずである。うつろいやすい天皇賛美報道とさまざまな服属儀礼のオンパレードが始まることもわかっている。天皇たちの都合でそれに変更があるうとなからうと、惑わされ振りまわされるのはまったくゴメンである。言うべきこと、やるべきことを、その都度考えていきたい。

私たちはこれまで考え訴えてきた天皇制の問題を、整理し直し、言葉を吟味し、全国の友人たちとともに、少しでも拡がりを持った運動を目指していくしかないのだ。天皇が国家の制度として存在しているかぎり、私たちは天皇制について考えなくてはならない。そして、戦前から戦中、戦後と、天皇を介在させ続けることで、植民地主義、占領政策に基づく侵略戦争の歴史と責任を曖昧にし、現在のこのひどい社会に至っていることへの関心をつくり出したい。

一昨年の天皇の「生前退位」意思表示表明から、いわば天皇代替わり騒動というものを私たちは経験し始めている。この国が、天皇(制)に對しては誰も、国家権力でさえも、ものが言えない社会であることを、多くの人が見たはずなのだ。しかし、それがいかに非民主的な社会であるのかの実感は共有されていない。課題の大きな一つだ。

本紙でも繰り返し伝えていたが、「元号はいらない」署名は継続中である。これは一つの切り口でありうるのだ。七月二日には集会も準備している(チラシ参照)。ぜひ一緒に考えていきたい。

(大子)

おカネの使いかた、あれこれ？

カンヌ映画祭での受賞を機に、『万引き家族』が広げてしまった問題は、ぼくたちにも無縁ではない。政府が偉そうに「褒めてかわす」としたのが始まりだが、是枝裕和監督は「映画がかつて、『国益』や『国策』と一体化」、つまりは戦争に協力したとして、「公権力とは距離を保つ」ほうがいいと、うまくかわした。一方で、この映画が文化庁の助成金をもらっているからと、「助成金を返納しろ」だの「祝意を断るのは失礼」だのと、方向違いの非難も相次いだ。

「カネと文化」は古くて新しい、やっかいな問題だ。ぼくは何であれ「受け取ってはならない」派なのだが、「税金を払っているのだから、受ける権利はある」という意見もある。「国家が信頼出来ないなら、信頼に足る国家を自分たちで造らねばならない」と。

そうね、ぼくらは「いま現在を再現」していると同時に「未来も実現」しようとしているのだから、「国家」だけじゃなく、自分たちのものを作りたいかも、当然、いま変えなきゃならないのだ。その中には「カネの流れかた」の問題も含まれるだろう。お上をだまして取り返した税金をぼくらの「未来」にどう使うか？ それこそが芸術家のウデの見せどころだと思うのだが、そんなウデの立つやつ、いる？

(三ディカル・文平)

日本人は日本語を占有するな！

いまさら当たり前すぎるのだが、○○語は○○人に属しているわけではない。世間にはなんと多くの、○○語を母語とする△△人や、△△語を母語とする□□人がいることだろう。いやだいたい、「母語」という言葉がよくない（「母国語」がいかにいうことで「母語」と言い換えるようになったそうだが）。だいたい「母」って何だ。人間は母が育てるとは限りません。というのはさておき、植民地や在日の作家の数々の名作を挙げるまでもなく、日本語は日本人でない人々によっても作られてきた。現代の大阪弁は、大阪に住んでる「日本人」だけでなく大阪に住んでる朝鮮・韓国人や、沖縄・琉球人や、その他たくさんの人たちによって作られてきたものだ。彼女たち彼たちを「母語」を奪われた人々とも見ることもできるだろうが、移住先の言語を乗っ取った人々たちと考えることもできる。大日本帝国の「臣民」たちに日本語が強制され（そしてそれがほとんど失敗した）ことと、今の日本語がその人たちの参加でできていることを忘れちゃいけない。言語だけでなく文化一般もそうだ。だから疲れる。「フランス語にはフランス人のどのような性格が表れていますか？」なんていう馬鹿な設問を見かけると。

(トメ吉)

やっぱりやめられんかあ…

今更だけど、デモを歩くのはつくづく面白いことだと思ふ。そこにはふだんとは違う時間の流れがあり、デモを歩く度に新鮮な気分になる。そして、コールを聞きながら今の状況に思いを巡らし、自分がそこにいる理由を考えたりする。デモ行進を眺める沿道や車道（車中）の人々を眺めるのも興味深い。おそらく、デモを歩くという行為がつかう時間の流れや思考があるのだ。だから、そういった特別の時間を作り出すデモは、つくるのも参加するのもやめられない。

そして、デモとそれを眺める沿道の人々の関係は、たとえば紙媒体や電波を使って表現する大小さまざまなメディアとその受手の関係にも近い。そうなり得ればデモは大成だ。であればいつの時代も、社会にとってデモはとても大切で素敵な経験であるはずだ。

とはいえ、自分たち主催のデモではなかなかそういった経験はできない。右翼と警察対応に忙しすぎるという理不尽な話。不幸としかいいようがない。それすらもこの社会の「大切な経験」であるなどとは言わせない。ただ、そんなデモでも、おそらく主催者・参加者ともども、何か特別の場を共有しているのは確かではある。そういう意味ではこれも一つの経験か……。む。む。

(橙)

反

天



ジャーナル

状況批評

思想・状況批評

象徴天皇制こそ倫理的頹廢の根源

彦坂諦（作家）

一二歳の夏、祖国の敗戦を植民地都市旅順で体験するまで、天皇陛下は大御心をもって民草を見まもってくださる現人神であるとわたしは信じていた。そのわたしが、その後、異民族支配のもとですごした四年ほどのあいだに、あらたな支配者にあられもなく迎合・豹変していくおとなちに反撥しながら、同年配の中国人少年たちから受けた迫害——北満の開拓民がこうむったのとは比較にならない些細な攻撃ではあったが——を契機に、すこしずつ、祖国日本がどこでなにをしてきたのかを知っていき、こうしたできごとのすべてに天皇裕仁が深くかわっていたことをも、しだいに理解していく。

一九四九年の秋に帰国してから、さらに数十年の歳月のあいだに、わたしは、裕仁天皇がいかに国民を裏切り瞞着しながら自分一身の生命を保全しえたかをも知るにいたる。

一九八九年、この天皇裕仁が死んだ直後に「私たちに資格がないからこそ——なぜいま天皇の責任を追及するのか」というタイトルの文章を、わたしは書いた（『破防法研究』六五号）。その要旨をまず紹介しておく。

天皇の戦争責任を追及する資格をわたしたちは欠いている。なぜか？ 一九四五年夏からいまにいたるまで、わたしたちにとって肝心要であったはずのことをアイマイウヤムヤにできてきているからだ。あの戦争のとき、わたしたちは、大小さまざまな権力に誘導されあるいは脅迫されて、ここからであれ、こころならずともであれ、〈殺し殺される者〉になった。そして戦後、このわたしたちの責任をわたしたち自身の手ではつきりさせることができなかった。その当然の結果として、わたしたちを〈殺し殺される者〉たらしめた者たち——その頂点に天皇はいた——の責任を明確にす

ることもできなかった。このようにわたしたちがみずからの責任をアイマイにしたまま今日にいたっていることが、どれほどの頹廢をわたしたちの精神生活にもたらしていることか。

それのみか、昭和天皇がついに責任をとらなかつたことで、わたしたちはなにかホッとした気分になえた。戦後、一貫してアイマイウヤムヤにしたまま放っておいたことが、なにもかも、これで水に流されたような気になった。

だからこそ、その天皇の責任を、わたしたちは、このいま追及しなければならぬ。いま追及するとはどういうことか？ すべてをあきらかにすることだ。彼の死を機に歴史に密輸されるであろうすべての偽りの記述を追放すること、彼の陵墓を飾るであろうもろの虚飾を剥ぎとることだ。わたしたちのこのアイマイさにつけこんで侵略の過去を栄光の過去に塗りかえわたしたちをもういちど〈殺し殺される者〉たらしめようとしている者たちの策謀を、粉碎することだ。それは、かつて〈殺し殺される者〉たらしめられたわたしたちの責任を、こんどこそ、わたしたち自身の手ではつきりさせることを意味する。その営為を通してこそ、天皇の責任を追及する資格が獲得されるのだ。

これを書いたころには、しかし、天皇裕仁の戦争責任をめぐる議論もまだありえたし、自民党内閣もいまほどの劣悪さを露呈してはいなかった。だが、このいま、わたしたちのこの国では、天皇の戦争責任を追及する声はほとんどきこえなくなっている。そして政治状況は最悪最低だ。この国の歴史上類を見ない品性劣悪にして無能無責任な男が行政府の頂点に君臨し、官僚はこの総理の顔色ばかりうかがっているし、政治家も財界人も司

法官も報道人も教育者すら、おしなべて、腐敗墮落している。そういったひとびとを監視しつつ民主主義の根底をまもるべき民衆自身まで道義的頹廢をまぬかれていない。

このようなていたらくにおちいった根本原因は、人間にとつてなによりもたいせつなこと、すなわち、自分のあたまで考え、自分できめて行動し、その行動の結果には自分が責任をとるという、この倫理観念が、象徴天皇というアイマイな存在によって、麻痺させられていることにある。道義頹廢の根源は、だから、象徴天皇制という民衆瞞着装置にある。そう、わたしは考えている。その根源は、そして、一九四五年八月にある。つまり諸悪の根源はあの「敗けた」にあった。

かつての戦争で同盟国（枢軸国）であったイタリアでもドイツでも、戦後は、過去を清算してまったく新しい国家をつくった。この日本でだけ、従来の支配層が、占領軍ととりひきして天皇を温存し、みずからの支配権力を維持した。

とはいえ、戦前戦中のように天皇が現人神として君臨しつづけることをゆるせば、いくらなんでも民衆の反発はまぬかれまい。そこで日米双方の民衆統治者がひねりだした秘策が象徴天皇制であった。具体的には、東条以下の戦中政治首脳を天皇のスケープゴートとして連合国による戦犯裁判にさしだす。そして天皇の責任は解除する。この象徴天皇制という民衆瞞着装置を定着させるために、天皇の「人間宣言」と「天皇巡幸」が演出された。この一連の猿芝居のコンセプトは、あの戦争をひきおこしたのは軍部であつて、天皇は平和主義者であつたのだと民衆におもひこませることであつた。

天皇裕仁本人は怯懦にして陋劣であつた。ひたすらわが身一身の安泰をのみはかつて、民草の悲惨などかえりみなかつた。この男がなによりもおそれていたのは革命だつた。ポツダム宣言を受諾したのも、本土決戦になれば民衆が革命をおこすかもしれないという恐怖からであり、戦後沖繩を米軍に売りわたした安保体制に執着したのも、おなじ恐怖心からであつた。この男に責任という概念は無縁だつた。

敗戦を終戦にすりかえてその本質をごまかし、そのことによって、じつさいには「大日本帝国」を崩壊にみちびき三百万人におよぶ自国民と数千万人におよぶアジアの民の生命をうばつたあげく自国も他国も荒廢させたその張本人が、その責任を問われることなく、自決もせず、処刑もされずに、生きのびた。その結果として、戦前戦中の天皇制による「一億総無責任体制」が、戦後の象徴天皇制に、みごとにひきつがれてしまった。

戦前戦中は現人神として戦後は象徴として、あいもかわらず、おなじ肉体をもった人間が、のうのうと、民衆の手とどかない宮居の奥で、餓死もしないで、生涯をまっとうしえたのだ。天皇にしてかくのごとくでありえたのなら、日本国民たるもの、過去のすべてに責任をとらず、そのことを自覚さえしないで戦中も戦後もただとおりぬけてしまった、というのも自然ななりゆきではなかつたか？

わたしも知っている、天皇の責任問題は、直接の責任者であつた裕仁が死んでむすこの明仁が天皇になったことよつて解消してしまつたと思えるひとたちがいることを。たしかに、明仁は父裕仁のはたしえなかつたことを彼なりにしたそうとした。戦没者慰霊の旅、被災者への慰問、障害者への気配り、沖繩・韓国・中国訪問などなど。これらの行為を、明仁は一人としておこなつたのではない。天皇としておこなつたのだ。なぜか？愛される天皇になることで象徴天皇制を恒久化したいとねがつたからだ。じじつ、裕仁の時代にはまだ居心地の悪さもあつた象徴天皇制が明仁のこのような行為によつてこの国に根づいた、と言えるのかもしれない。

国民に「愛される天皇」になろうと明仁が懸命に努力してきた、そのきもちにいつわりはないだろう。だが、そうした努力のすべてが根源的にあやまつていたことに、彼は気づいていない。気づくすべもないまま、天皇の地位をむすくにゆずろうとしている。そして、明仁という人間を尊敬しても愛してもないくせに、そうであるかのように演出することによつて、おのれの私的利益をまもりとおそうとしている者たちがいる。

この明仁は、ただひとつ、父である裕仁の行動に対する批判だけはなしえなかつた。それのみか、裕仁が平和主義者であつたという虚構のイメー

じづくり貢献しさえしている。なぜ、なしえなかったのか？ 彼が天皇であつたからだ。天皇であるかぎりこのような行為はなしえない。明仁という人物の資質のゆえにではなく、天皇制という制度のゆえにだ。明仁から徳仁へ再度代替りしたところで、この点はいささかもかわるまい。

問題は、こうした象徴天皇制をひとびとがすんなり受け入れていることだ。熱烈な天皇教信者はべつとして、いま、どうしても天皇がいなければこまるというひとは、たぶん、そうはいはいだろう。だからといって、しかし、天皇制を廃止することにはなんとなくためらいや違和感があるようだ。

じつさい、わたしが接しているひとたちの大半は、原発は一刻もはやくやめさせたい、からだに害のある食品はなくしたい、戦争には反対で、平和はつくりあげなければならぬ、あらゆる差別に反対、死刑制度は廃止すべきだ、などなど、わたしと共通のねがいをもっている。ただひとつ、天皇制は廃止しなければならないというわたしのおもいだけは、わかつてもらえない。こういうひとたちと、どうすればおもいをわかちあえるのか？

そういうおもいから、遠くは菅孝行と貝原浩が『天皇制 (FOR BEGINNERS シリーズ)』(現代書館、一九八三)を、池田友彦が『どうしてえらいの？』(天皇陛下) (双柿舎、一九八三年)を、近くは池田浩士が『子どもたちと話す天皇』(現代企画室、二〇一〇)を世に問うたのだろう。いずれも、よくできた本だ。とりわけ、池田のそれは、組みたてかたも「ミッチャン・ヤーくん、おじいちゃん」のやりとりも、考えぬかれた平易なことばで書かれていて、秀逸だ。しかし、こういう本がどれほどのひとたちに読まれているのだろうか？

いま、天皇の元首化をねらう動きが顕在化してきている。そのような動きに反撥して、象徴天皇制を日本古来の伝統文化として印象づけようとする動きもある。山折哲雄という宗教学者などがその典型だ(『一四歳からの天皇と皇室入門』)。この彼によれば、この国には長くつづいた平和な時代が平安・江戸時代と二度もあつたが、それが可能であつたのは、政治がカリスマ的権威Ⅱ象徴を侵さず、カリスマ的権威Ⅱ象徴は政治と一線を画

すという相互抑制体制をつくりあげたからだそう。こういう動きにも注意をはらう必要があるだろう。おりしも「女天研」から「眞子結婚延期と憲法二四条」という学習会の案内がとどいた。まさにこのいま、こういう角度からも考える好機であるだろう。

さいごに、わたしには、どう考えてもふしぎなことがある。天皇は「日本国民統合の象徴」で「この地位」は「日本国民」の「総意に基づく」となっている(憲法第一条)ことについてだ。まず、わたしも法的にはまぎれもなく日本国民のひとりだが、なににも、だれにも、絶対に統合などされたくない。天皇を支持してもいない。そういう国民がたとえわたしひとりでもいるのなら、「総意」になどなりようがないではないか。

つぎに、「日本国民」とは日本国籍を取得している者のことだ。そのなかには民族的に日本人に属していないひとたちもいる。韓国人、中国人、台湾人、モンゴル人、インドネシア人、アメリカ人、ブラジル人、フランス人、フィンランド人、ロシア人、セネガル人、ナイジェリア人など多彩だ。日本国民イコール日本人であるとかつてにきめつけて、いいのか。日本人のなかにもわたしのような者がいるというのに、日本人でないこれらのひとびとがこぞって天皇を支持しているのだと断定できるのか。そうできないかぎり、しかし、「日本国民の総意」とは言いえないではないか？

(五月六日記)

明治公園のオリンピック追いつけを許さない！ ～国賠訴訟提起～ 首藤久美子（明治公園オリンピック追いつけを許さない国家賠償請求訴訟原告団）

明治公園オリンピック追いつけを許さない国家賠償請求訴訟原告団です。このたび、独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）・東京都・国を相手取り、国家賠償請求訴訟を提起しました。

二年前の二〇一六年三月一日、東京五輪のメイン会場・新国立競技場建設をおしすすめるJSCは、都立明治公園に暮らしていた野宿生活者三名に対し、土地の明け渡しを求める仮処分を申請しました。東京地裁はこれを却下するどころかやすやすと認め、四月一六日早朝、突然の強制執行に及びました。近年、自治体が野宿者を行政代執行で強制排除するケースが散発し問題になっていますが、都立公園において東京都が行政代執行をかけたケースはこれまで一度もありません。野宿者の人権に責任を持つべき行政が、野宿者が住んでいると知りながら公園を民間企業（JSCは文科省管轄の独立行政法人ですが民間扱い）に貸し出し（しかも無償貸与）、借りた側の民間企業が、野宿者個人に仮処分を申立て強制排除するなどというやり方は、前代未聞、異例中の異例です。

この「断行の仮処分」により、明治公園の野宿の仲間たちは、大事な荷物の一切合財、着替えや食料や布団など生活必需品、工具や台車など仕事道具、身分証やダンボール手帳、一円玉貯金などわずかな財産のすべてを、遠く晴海までトラックで丸ごと持ち去られました。また今回ともに原告として提訴した四団体、国立競技場周辺で暮らす

野宿生活者を応援する有志、反五輪の会、渋谷・野宿者の生存と生活をかちとる自由連合（のじれん）、山谷労働者福祉会館活動委員会も、テント、コンロなど野宿支援物資を多数持ち去られました。執行対象者ではないにもかかわらず、執行範囲外の場所にあった荷物まで、丸ごとやられました。

民事執行法は168条5項で「執行官は、第一項の強制執行においては、その目的物ではない動産を取り除いて、債務者、その代理人又は同居の親族若しくは使用人その他の従業員で相当のわきまのあるものに引き渡さなければならぬ。」としています。トラックが発するさい、荷物の返却を求めた仲間一名は、強制執行妨害行為容疑で不当逮捕されました。しかし、返却に応じなかった執行官（国）の行為こそ、不法ではないのか。そもそも「このままではオリンピック・パラリンピック大会の開催に間に合わない」ことを理由とした、JSCの「断行の仮処分」の申立ての内容自体が不当なものでした。にもかかわらず、東京地裁民事部は審議をつくすことなく、野宿住人の生活を根こそぎ奪う強制執行を断行しました（なお、このかん法務省法制審議会では「シングルマザーの支援」を口実にクレジット会社、金融機関などを利するための民事執行法の改悪が検討されていることを付け加えておきます）。二〇二〇オリンピックに向け、このような事後的に回復不能な強制執行が、野宿生活者に対し濫用されるような

ことが二度とあつてはなりません。私たちは徹底的に争います。

六月二六日、明治公園オリンピック追いつけを許さない国賠の第一回目が開かれました。原告である明治公園野宿住人と四団体に与えられた時間は、たったの三〇分でした。東京地裁706号法廷は満員御礼、意見陳述のたびに拍手が沸き起るという感動的な幕開けになりましたが、JSC・国・東京都の被告三者は、口裏を合わせたように、「国立競技場周辺で暮らす野宿生活者を応援する有志などの団体原告は、当事者能力を有していない」から却下するように、との答弁書を提出してきました。私たち原告団はこのような、野宿者を友人から、支援者から、社会から分断し、孤立させ、追い込む権力側の策動を、絶対に許さない。徹底的にはねかえしていく所存です。

とはいえ、野宿の仲間はもちろん、原告四団体にとつても、裁判闘争は敷居が高いです。不得意分野です。野宿の仲間たちと力を合わせて、なんとか粘り腰でこの裁判をがんばって闘っていきたい、そのためにも、裁判所の中だけでなく、法廷の外の闘争にいかにつけていけるかがキモだと思っています。ご支援、ご注目、カンパでどうか支えてください。よろしくお願いいたします！

第二回期日：二〇一八年九月四日（火）午後三時半

東京地裁706号法廷

明治公園オリンピック追いつけを許さない国家賠償請求訴訟原告団

メール noolympicvict@gmail.com

カンパ振込先・郵便振替【口座番号】

00120-8-265747 銀行口座：三井住友銀行町屋支店

（普） 7122609

紹介

2020オリンピックに抵抗するためのパンフレット集

宮田仁(2020「オリンピック災害」おことわり連絡会)

私たち2020「オリンピック災害」おことわり連絡会(略称・オリンピックおことわりリンク)は二〇一七年一月二二日に

発足。オリンピック開催が多くの分野にもたらしている状況を「災害」とらえ、さまざまな運動をネットワークでつなぐことを目的としている。オリンピックの問題点を多様な観点から明らかにし、それに抵抗していくための取り組みの一つとして連続講座を立ち上げ、その記録をパンフレット化してきた。

パンフvol.1は、連続講座のプレ企画として海外からゲストを招いた「国際おことわりコンベンション(IOC)」の記録。ピョニャン五輪反対運動のイ・ギョンリョルさんとスポーツ・ジャーナリストの谷口源太郎さんの講演(一七年二月二五日、ピープルズ・プラン研究所)と、リオ五輪の住民排除問題に取り組むジゼレ・タナカさんの講演(三月三日、千駄ヶ谷区民会館)を収録した。連続講座第

一回は小倉利丸さんの「五輪災害と共謀罪」(四月八日、文京区民センター)だったが、共謀罪成立(六月一五日)以前の講演で、小倉さんの同趣旨の講演のパンフが別に発行されていることもあり、パンフ化を見送った。

vol.2は連続講座第二回「東京五輪のメインスタジアム建設すすむ神宮外苑の再開発地区を歩く」(一七年五月二七日)。アツミマサミさん(東京にオリンピックはいらないネット)の案内による神宮外苑フィールドワークと、その後の渋谷区稲田区民会館での講演会。五輪を口実に利権者だけを潤す「開発」が着々と進められていることを実感させた。

vol.3は講座第三回「パラリンピックは障害者差別を助長する」(一七年七月一五日、千駄ヶ谷区民会館)。増田らなさん(障害児童学校労働者)が、学校現場でのオリパラ教育強制の実態を報告し、北村小夜さん(障害児を普通学校へ全国連絡会)が、「がんばる障害者」を動員して他を排除するパラリンピックの問題点と、パラリンピックや国旗について子どもたちに「書いて考えさせる」新しい道徳教科書の恐ろしさをも明らかにした。

これから出るvol.4は講座第四回「オリンピックはスポーツをダメにする!」(一七年



一〇月九日、アカデミー音羽・多目的ホール)で、講演は山本敦久さん(成城大学教員)の「アスリートたちの反オリンピック」と、岡崎勝さん(自由すばー

研究所・所長)の「オリンピック精神からスポーツ・体育を問い直す」。今月二二日、オリンピック開催二年前へ向けた原宿アビール&渋谷デモで配布する予定である。

講座第五回「ナショナルイベントとしての東京五輪」(一七年二月一六日、一橋大学)では天野恵一さん(反天皇制連絡会)と鶴飼哲さん(一橋大学教員、第6回「3・11と『復興五輪』」(一八年三月三十一日、文京区民センター)では小出裕章さん(元・京都大学原子炉実験所)と佐藤和良さん(いわき市議会議員)がすでに話されており、これらも順次パンフ化してゆく。九月の「オリンピックと映像」から連続講座の第二期もはじまる。

vol.2からフリー編集者として原稿チェックのお手伝いをしている。表紙デザインはアーティストの八揆瑞子さん。講演のさい配布された貴重な資料も収録されており、いざこれらパンフのエッセンスをまとめて世に出せれば、オリンピックに抵抗するための強力な武器となるだろう。「やって当然」と思われている大イベントに一矢報いて、すべてを変えはじめるきっかけにできないか。今からでもおそくない。

オリンピックおことわりリンク

<http://www.2020okotowa.link/>

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく98

「貧しい」現実を「豊かに」解放つ想像力



10や50や100のように「数」として区切りのよい周年を祝ったり、内省的に追憶したり、それに過剰に意味付与したりするのはおかしいと常々思っている。だが、ロシア革命百年（一九一七）、米騒動・シベリア干渉戦争百年（一九一八）、三一独立運動／五・四運動百年（一九一九）、関東大震災・朝鮮人虐殺百年（一九二三）という具合に、近代日本の歩みを顧みるうえで忘れ難い百周年が打ち続くこの数年には、その歴史的な出来事自体はもとよりこれに続いた歴史過程の検証という視点に立つと、深く刺激される。百歳を超えて存命されている方を周辺にも見聞きするとき、ああこの歳月を生きてこられたのだ、と思いはさらに深まる。

厄介な「米国問題」を抱えて苦悶する近現代の世界を思えば、五年後の二〇二三年は、米国は身勝手なふるまいをするぞと高らかに宣言したに等しいモンロー教義から二百周年期にも当たることが想起される。それに、現在のトランプ大統領の勝手気ままなふるまいを重ね合わせると、他地域への軍事侵攻と戦争に明け暮れている米国二百年史が重層的に見えてきて、嘆息するしかない（いまのところ、唯一、トランプ氏の対朝鮮外交だけは、伝統的な米外交政策顧問団が不在のままに大統領単独で突っ走ったことが、局面打開の上で有効であったと私は肯定的に

判断しているが、この先たどるべき道は、なお遠い。紆余曲折はあろうとも、よい形で、朝鮮半島南北間の、そして朝米間の、相互友好関係が築かれることを熱望しているが……）。

さて足下に戻る。冒頭に記した百周年期を迎える一連の出来事を見ても一目瞭然、問題は、百年前の当時、日本が東アジアの周辺地域といかなる関係を築いていたのかとふり返ることこそが、私たちの視点である。先ごろ実現した南北首脳会談と朝米首脳会談に對して、日本の政府、マスメディア、そして「世論」なるものが示した反応を見ても、この社会は総体として、朝鮮に対する植民地主義的態度を維持し続けていることがわかる。民族的な和解に向けた着実な歩みを理解しようと思わずに、そこには「ぼくがいない」「拉致問題に触れていない」などと駄々をこねているからである。この腹立たしい現実を思うと、改めて、「日韓併合」から一〇年ほどを経た一九二〇年前後の史実に、百年後の今いかに向き合うかが重要な課題としてせりあがってくる。

その意味で注目に値するのが、公開が始まったばかりの瀬々敬久監督の映画『菊とギロチン』である（二〇一八年）。関東大震災前後に実在した、アナキスト系青年たちの拠点『ギロチン社』に集う面々を描いた作品である。ギロチン社の実態を「存知の方は、

そんなことに何の意味がある」と訝しく思われよう。大言壮語を駆使して資本家から「略奪」した資金を酒と「女郎屋」で使い果たしたり、震災後の大杉栄虐殺に怒り「テロ」を企てるも悉く惨めな失敗に終わったりと、ギロチン社に関しては情けなくも頼りない史実が目立つばかりである。映画はそこへ、当時盛んであった女相撲の興行という要素を絡ませた。姉の死後、姉の夫だった男の「後妻」に、こころ通わぬままになったが、夫の暴力に耐えかねて貧しい農村を出走した花菊（木竜麻生）にまつわる物語は、当時の農村社会の縮図といえよう。元「遊女」の十勝川（韓英恵）は朝鮮出身の力士と設定されているが、彼女が経験してきたことがさまざまな形で挿入されることで、物語は一気に歴史的な現実性裏づけられた深みと広がりをもつものとなった。過去の、実態としては「貧しい」物語が、フィクションを導入することによって、現在の観客にも訴えかける、中身の濃い「豊かな」物語へと転成を遂げたのである。大言壮語型の典型と言うべき中濱鐵（東出昌大）も、思索家で、現金奪取のために銀行員を襲撃したときに心ならずも相手を殺害してしまったことに苦しむ古田大次郎（寛一郎）も、この物語の中では、いささか頼りないには違いないが、悩み苦しむつつ、「自由な世界」を求める人間として、生き生きとしてくる。大震災の直後の朝鮮人虐殺にまつわる挿話は、十勝川も、威張りちらす在郷軍人も、今は貧しい土地にへばりついて働いているが、自警団としての耐え難い経験を心底に秘めたシベリア出兵兵士も、それぞれの場から語って、映画の骨格をなした。

現実とは、ご存知のように、耐え難い。想像力が解放つ映像空間を楽しみたい。

（7月6日記）

マスコミの
いけの
天皇制 24

首都圏原発「東海第二」再稼働・オリンピック・「生前退位」 ―「壊憲天皇明仁」その22



昨年の一二月二四日に日本原子力発電（原発）

は、「東海第二原発」の二〇年運転延長を原子力規制委員会に申請した。この今年の一二月で四〇年を迎える老朽原発、〈3・11〉の時は自動停止後、外部電源喪失、あわやという状態になったが、奇跡的な偶然によって過酷事故にいたらなかったというボロボロの被災原発を、さらに二〇年運転しようというのだ。今年の一二月二七日で廃炉が自動的に決まっている。それをである。この東京の端までたった一〇キロの周囲に人口が密集する首都圏原発は、原発の立地（茨城県）三〇キロ圏内には九六万人の住民がおり、過酷事故が起きれば一五〇〇万人が生活している東京はもとより、五〇キロ圏の栃木東部、八〇キロ圏の千葉をはじめ、関東一帯の全住民に大量な放射能が降り注ぐことになることは必至という恐るべきしろものである。とても正気の人間のすることとは思えない。

私も事務局メンバーとして活動している「再稼働阻止全国ネットワーク」は、五月二一日に首都圏（一都七県）の反原発グループや個人とともに「とめよう！『東海第二原発』首都圏連絡会」を結成し、原発はもちろん、政府（経済産業省）原発への資金援助を決めている東京電力等の電力会社、そして「安全規制」どころか、再稼働促進委員会になりさがつているというしかない「規制委」への多様な抗議活動を開始している。この渦中、

原子力規制委員会は、七月四日、安全対策の基本方針が新規規制基準を満たすと認定した。私たちは耳を疑った。六月二一日に行われた設備の性能試験、原子炉建屋の開口部を「ブローアウトパネル」板で閉じるための実寸大設備に強い揺れを加えるテストで「板が約五センチ開き開閉用操作チェンが切れた」（「茨城新聞」六月二七日）との報道を眼にしていたからである。

行き場もなく東海村に留まり続けている使用済み核廃棄物は、すでに原爆五千発分の死の灰といわれている。再処理工場の冷却が止まる複合災害は、関東全体を人間が住めない空間に変えてしまうことは、まちがいない。もちろん大人口密度地帯である。避難など不可能である。古い原発の運転延長は当面電力会社の利益が大きいという利潤衝動に突き動かされている（原子力ムラ）のまったく安全など無視した暴走。これをストップさせられるのは運動の大衆化だけだ。

原子力規制委は三月二〇日に福島県内のモニタリングポストの撤去していく方針を表明した。「原発いらない福島の人たち」の黒田節子はこう叫んでいる。「ふざけるな！ とんでもないことだ！ 放射能が目に見えないことをいいことに福島県民がこれほどまでに、またしてもバカにされているかと思うと怒り心頭に発す、ダ。事故後七年の今でも、いぜんとして広い範囲で除染土や除染ゴ

ミが仮置き場にある。『廃炉』作業が行われている限り、除染土や除染ゴミが存在する限り、事故以前のレベルに戻るまでは設置を継続すべきである。急きよ、知人友人たちと連絡を取り合って『モニタリングポストの継続配置を求める市民の会』設置にこぎつけた（「フクシマから」『ビープルズ・プラン80』（五月一五日）号）。

「復興」されたというイメージ演出のための安倍政権の棄民政策。原発再稼働もこうした「復興」演出も、二〇二〇年東京オリンピック対策でもある点を私たちは忘れるわけにはいかない。安倍首相の世界へ向けた「放射能はコントロールされている」という大ボラによって東京開催が決定された。そのあきればた虚言の政治。それは福島のみならず東京、そしてニッポン安全宣言であったはずだ。嘘はつきとおさなければならぬ。原発は再稼働され、「復興」のイメージは演出され、東京オリンピックは「安全」と世界の人々に実感されなければならない。

この人々の生命など屁とも思っていないグロテスクな政治に、天皇の「生前退位」希望のメッセージという政治がクロスした。自分が即位した年齢をすでに超えた皇太子をオリンピック前に即位させ、「元首」として世界にオリンピック開会宣言という政治舞台をつくってやりたいという超特権的「親心」（？）。それは（象徴）のままたの「元首化」を目指す自民党安倍政権の「改憲プラン」にもそった天皇の政治的野望である。

この安倍政権・天皇（原子力ムラ）が一体化した破廉恥の極みの政治の全体に反撃していく運動的視座が、「平成代替わり」状況下の、私たちの反天皇制運動には不可欠であるはずだ。

反天皇制運動

6月1日～6月30日

【6月1日】

明仁、美智子◆東京都港区にある明治記念館を訪れ、日本とベトナムの外交関係樹立45周年を記念するレセプションに出席。「国賓」として訪日中の同国のチャン・ダイ・クアン国家主席夫妻が同席。

【6月2日】

明仁、美智子◆「国賓」として訪日していたベトナムのチャン・ダイ・クアン国家主席夫妻に別れのあいさつをするため、東京・元赤坂の迎賓館赤坂離宮を訪ねる。夫妻と懇談。東京都港区のサントリーホールを訪れ、米国の五大オーケストラの一つに数えられるクリブブランド管弦楽団の日本公演を鑑賞。

【6月3日】

徳仁◆東京都台東区の上野学園石橋メモリアルホールを訪れ、ピオラ奏者らによるコンサート「ヴィオラスペース2018」を鑑賞。

【6月4日】

明仁、美智子◆東京都千代田区のホテルで開かれた海上保安庁創設70周年の記念式典に出席。

秋篠宮、紀子◆日本人移住150年を祝う式典や海外日系人大会開会式出席などのため、成田発の民間機で米ハワイに向かう。

海上保安庁◆海上保安庁創設70周年の記念式典が、東京都千代田区のホテルで開

かれる。明仁、美智子が出席し、安倍晋三首相ら約300人が参加。

【6月5日】

秋篠宮、紀子◆日本人移住150年を祝う式典出席などのため、ホノルル着の民間機で米ハワイ入り。

代替わり◆超党派の保守系議員でつくる「日本会議国会議員懇談会」（会長・古屋圭司・衆院議院運営委員長）が国会内で総会を開き、新天皇即位に伴う新元号の公表は即位日である翌年5月1日を原則にするべきだとの見解をまとめる。新元号について「平成（であるうち）に公表されれば、現陛下と新陛下の二重権威を生み出す恐れがある」。「女性宮家」創設は不要との認識で改めて一致。女性皇族が皇籍離脱後も「公務」を行えるよう政府に引き続き要望する方針を確認。

「海の日」◆自民党内で7月第3月曜日の祝日「海の日」を元来の7月20日に固定する案に賛否両論が渦巻き、党内閣第1部会で祝日法「改正」の是非を議論したが紛糾し、集約できなかつたと報道。

【6月6日】

秋篠宮、紀子◆米ハワイで、「ハワイ日本文化センター」を視察。ホノルル市長主催の昼食会に臨む。「皇太子明仁親王奨学金財団」の奨学生らと懇談。イオロニ宮殿を視察。日系3世のイゲ・ハワイ州知事主催の夕食会に臨み、秋篠宮がとあい

さつ。

女性皇族◆故寛仁が死去してから6年の命日に当たり、東京都文京区の豊島岡墓地で「墓所祭」が営まれる。

【6月7日】

明仁、美智子◆東京都新宿区の美術館を訪れ、英国を代表する風景画家ターナーの作品を集めた特別展を鑑賞。

明仁◆宮内庁が、中米グアテマラのフエゴ火山の噴火被害に対し、明仁6日、同国のモラレス大統領に見舞いの電報。

秋篠宮、紀子◆米ハワイで日系移民のために1900年に設立された病院内にあ

る高齢者施設を訪問。
小和田恒◆雅子の父で国際司法裁判所（ICJ）、オランダ・ハーグ）に15年在職した小和田恒・裁判官が退任前日の共同通信のインタビューで、法の支配を逸脱する傾向を強める大国の行動は「非常に危険」と述べる。

【6月8日】

秋篠宮、紀子◆米ハワイ大マノア校で日本語を学ぶ学生と交流。いずれも大学が管理するタロイモ畑や植物園を見学。夜、移住150年を祝うレセプションに出席。宿舎近くのホテルで開かれた日本人のハワイ移住150年を祝う式典に出席。帰国の途に就く。

桂宮「墓所祭」◆明仁のいとこにあたる故桂宮が死去してから4年の命日に当たり、東京都文京区の豊島岡墓地で「墓所祭」が営まれる。

【6月9日】

明仁、美智子◆福島県南相馬市で開かれ

る第69回全国植樹祭の式典出席などのため、特別列車で福島県入り。いわき市を訪れ、復興公営住宅「北好間団地」で東京電力福島第1原発事故で避難した被災者と懇談。富岡、浪江、双葉、大熊の4町の被災者4人と町長らが参加。いわき市の観光施設「スパリゾートハワイアンズ」で、植樹祭関係者が集まるレセプションに出席。

徳仁、雅子、愛子◆徳仁、雅子が結婚から25年の銀婚式を迎えたとして、東京・元赤坂の東宮御所で、三権の長や宮内庁東宮職の職員らによる祝賀行事が行われる。外遊中の安倍晋三首相の代理として麻生太郎・財務相と、衆参両院議長、最高裁長官らが東宮御所を訪れて祝意を伝える。夕方、愛子が同席。

徳仁、雅子◆結婚から25年の銀婚式を迎えたとして、宮内記者会の質問に文書で回答。

秋篠宮、紀子◆米ハワイから羽田着の民間機で帰国。ハワイを離れる直前に、ハワイ沖縄センターを視察。紀子が単独で、絵本の読み聞かせを通して子どもたちに本に親しんでもらうことを目的とする団体の関係者と懇談。

【6月10日】

明仁、美智子◆福島県いわき市の宿泊先から常磐自動車道を北上。福島第1原発がある大熊町や双葉町の帰還困難区域を通過し、津波で死亡した住民の慰霊碑に立ち寄る。南相馬市で開かれた第69回全国植樹祭の式典に参列。

【6月11日】

明仁、美智子◆福島県相馬市を訪れ、東

日本大震災による津波の犠牲者の慰霊碑に供花。相馬市内の水産施設を訪れ、震災で死亡した消防団員の遺族の出迎えるを受ける。魚の仕分け作業を見学。福島市にある地元出身の作曲家古関裕而ゆかりの品を展示した記念館を視察。福島県での2泊3日の日程を終え、帰京。宮内庁によると、美智子が過労で38度台の熱が出たが、「公務」を予定通りこなしたと報道。

佳子◆国際基督教大の交換留学プログラムを利用して英リーズ大に留学中の佳子が、リーズ大内の劇場を視察。

彬子◆故寛仁の長女彬子が、客員研究員として勤務する学習院大国際センターの仕事で米國を訪問するため、成田空港を出発。

明仁、美智子、徳仁、雅子◆結婚25年の銀婚式を迎えたとして徳仁、雅子が、明仁、美智子にあいさつするため、皇居・御所を訪問。半蔵門を車で通過。明仁、美智子と共に昼食。皇居・宮殿で宮内庁や皇宮警察の職員らの祝賀を受ける。夕方、宮内庁の山本信二郎長官ら幹部が東宮御所を訪れ、徳仁、雅子に祝意を伝える。

【6月14日】

徳仁、雅子◆東京都新宿区の東京オペラシティコンサートホールを訪れ、ウィーン少年合唱団の日本公演を鑑賞。

秋篠宮◆空路日帰りで徳島県を訪問。北島町の北島北公園総合体育館を訪れ、名誉総裁を務めるひょうたん愛好家の団体

「全日本愛瓢会」の展示会を見学。

【6月15日】

明仁◆東京都墨田区の浜野製作所を訪れ、金属加工の工場や、ベンチャー企業の開発拠点を視察し「いい研究が進むと、多くの人の幸せにつながりますね」。

佳子◆国際基督教大の交換留学プログラムを利用して、英リーズ大に留学していた秋篠宮の次女佳子が、羽田着の民間機で帰国。羽田空港で、宮内庁の河野太郎・宮務課長らから出迎えを受ける。

【6月17日】

天皇、皇族◆結婚25年の銀婚式を迎えたとして徳仁、雅子が、明仁、美智子や秋篠宮一家ら皇族を東宮御所に招き、夕食会を開催。元皇族や親族らを含めて約50人を招待。夕食中、宮内庁楽部による演奏が流れ、夕食後は徳仁、雅子と親交のあるピアノリストとバイオリンリストによる演奏を鑑賞。

久子◆モルドビア共和国議会のチビルキン議長が、故高円宮の妻久子の観戦予定について「久子さまを受け入れることは高い誉れだ」。

【6月18日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が、日本芸術院賞の受賞者を皇居・宮殿に招き懇談。徳仁と秋篠宮、紀子が同席。

明仁、美智子◆東京・上野の日本芸術院会館で、第74回日本芸術院賞の授賞式に出席。これに先立ち、会館内で受賞者から直接活動内容の説明を聴取。午後、皇居・宮殿で懇談。／宮内庁の西村泰彦次長が記者会見で、大阪府で震度6弱を観

測した地震について「天皇、皇后両陛下が、被害の状況を気に掛けておられる」。午後、伊勢神宮（三重県）で祭祀を終えた神宮祭主の長女黒田清子と皇居・御所で面会する予定だったが、地震の影響で東海道新幹線が遅延したため、取りやめに。

【6月19日】

秋篠宮◆広島市を訪れ、総裁を務める日本植物園協会の第53回大会開会式に出席。久子◆ロシア中部サランスクに到着。サッカーワールドカップ日本代表の初戦、コロンビア戦を観戦。

【6月20日】

秋篠宮◆日本植物園協会の第53回大会開会式出席などのため、広島市を訪れていた秋篠宮が、広島市植物園を視察。

【6月21日】

彬子◆美術館での講演などのため米國を訪問していた故寛仁の長女彬子が、羽田着の民間機で帰国。

【6月22日】

眞子◆日本人移住110周年に当たり、秋篠宮の長女眞子が7月17〜31日、ブラジルを「公式訪問」することが閣議で了解される。

歴史認識◆近現代史を検証する自民党の「歴史を学び未来を考える本部」が、専門家による講演録を秋をめどに販売する方針を決める。高校で近現代史を学ぶ必修科目「歴史総合」が2022年度に新設されるのを見据え、教科書づくりに反映してもらう思惑があり、下村博文・本部長が会合で「しっかりと歴史観を学ぶ」という意味で、この本部の役割は大きい。

【6月23日】

明仁、美智子◆沖縄戦で組織的戦闘が終結したとされる「慰霊の日」に当たるとして、皇居・御所で黙とうしたと報道。

美智子◆東京都渋谷区にあるBunkamuraオーチャードホールを訪れ、ピアノリストの小山実稚恵のコンサートを鑑賞。黒田清子夫妻が同席。

秋篠宮一家◆東京都目黒区のコンサートホールを訪れ、日本とインドネシアの国交樹立60年を祝うコンサートを鑑賞。

【6月24日】

明仁、美智子◆美智子の実家だった東京都品川区の旧正田邸跡地を整備した公園「ねむの木庭」を訪問。

久子◆サッカーワールドカップの日本代表戦観戦などのため、皇族として102年ぶりにロシアを訪問中の故高円宮の妻久子が共同通信のインタビュに応じ「重みもあるが、何うことができてとてもうれしい」と語ったと報道。ロシア訪問について「宮内庁が外務省と協議し、外務省の見解は『来ない方が政治的』という結論に達した」と説明した上で「こちらは受け身なので『よく協議、検討した上で結果を出してほしい』と伝えた」と話す。

【6月25日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が、皇居・宮殿に日本学士院賞の受賞者らを招き懇談。徳仁と秋篠宮、紀子が同席。雅子は15年ぶりに出席する予定だったが、前週からぎっくり腰になったとして見送ったと報道。

明仁、美智子◆東京・上野の日本学士

院会館を訪れ、日本学士院賞の第108回授賞式に臨席。授賞式に先立ち、受賞者から研究成果の説明を受ける。／小児がんの子どもや家族らを支援するチャリティコンサートを鑑賞するため、東京・渋谷のホールを訪れる。

久子 ◆ロシア・エカテリンブルクで、引き分けに持ち込んだ日本代表のセネガル戦を観戦。

元号 ◆小泉純一郎・元首相が、1989年1月7日の昭和天皇死去を受け、当時厚相として出席した臨時閣議で提案された三つの元号候補のうち、出典の説明があったのは「平成」だけだったと明らかに。東京都内での講演で。小泉元首相によると、臨時閣議で首相官邸側から「修文」「正化」「平成」の順に元号案の紹介があったが、「修文」「正化」には出典の説明がなく、その後、当時の石原信雄・官房副長官が「平成でいかがでしょうか」と提案、竹下登首相がうなずくと、みんなうなずいたという報道。「一人ぐらい質問すればいいのに誰もしない。異論ない。それで決まっちゃった」と述べ、あらかじめ「平成」に決まるように道筋が付けられていたと

の見方を示す。

〔6月26日〕

明仁、美智子 ◆静養のため、神奈川県葉山町にある葉山御用邸に入る。／大阪府北部地震で被災した大阪府に対し、宮内庁を通じ、見舞金を贈る。

久子 ◆成田着の民間機で帰国。帰国報告のため、皇居の賢所を参拝。半蔵門を通過。

絢子 ◆故高円宮の三女絢子が、日本郵船社員の守谷慧と結婚することが分かる。宮内庁が結婚式を10月29日に東京・明治神宮で催すと発表。7月2日に皇居・御所で明仁、美智子にあいさつして婚約内定が正式に決定し、8月12日に結納に当たる「納采の儀」を東京・元赤坂の高円宮邸で執り行つて婚約が成立すると報道。虚偽答弁 ◆沖縄沖での米軍嘉手納基地（沖縄県嘉手納町など）所属F15戦闘機の墜落を巡り、日本政府が米側に飛行停止を要請していなかったことが、防衛省への取材で分かる。安倍晋三首相は25日の参院予算委員会（飛行）中止を申し出たと述べており、事実と食い違う答弁をしたことになる報道。

〔6月27日〕

久子、絢子 ◆高円宮邸がある東京・元赤坂の赤坂御用地を車で出発。2016年10月に死去した祖父、三笠宮の月命日のため、墓のある東京都文京区の豊島岡墓を訪ねる。

皇族警備 ◆近年、皇族が地方を訪れた際の警備が「ソフト路線」に変わりつつあるとして、9・11日に明仁、美智子が訪問した福島県でも警官が「今日は皆さん、県内からですか」「旗は大きく振りまいたいと思いますが、胸の前で小さく振りましょう」と沿道の観衆と対話しながら、円滑な警備を実施したと報道。県警警備課によると、このような手法は全国的な潮流だといひ「警察が陛下と国民の間の壁にならないように」と心がけ、2年以上前から準備を重ねてきたという。

三の丸尚蔵館 ◆宮内庁が、皇居・東御苑にある「三の丸尚蔵館」について、2025年度ごろの完成を目指し、同じ場所建て直す方針を明らかに。

〔6月28日〕

明仁、美智子 ◆静養先の神奈川県葉山町の葉山御用邸から帰京。

眞子 ◆眞子との婚約が内定している小室

眞子 ◆眞子とのかと考えている。

前回のXデー、天皇代替わりはもう

三〇年も前、今の三〇代は断片しか記憶

にないだろうし、大学生に至ってはそも

そも生まれていない。そんな若い人た

ちに来てはしくて今回は企画した。しか

し当時をまとめた、入手しやすい本はあ

まりないという事実は今改めて気づく。

主が法律を専門的に学ぶためとして、勤

務先の法律事務所の支援を受け、夏にも

渡米することが、複数の関係者への取材

で分かる。

〔6月29日〕

明仁、美智子 ◆宮内庁が、明仁、美智子

が7月9日から1泊2日の日程で、静岡

県を「私的」旅行で訪問すると発表。親

交のある女優宮城まり子が運営する養護

施設や、ベトナム独立運動を支えた邦人

医師のゆかりの場所を巡ると報道。

美智子 ◆東京都港区のホテルを訪れ、ア

ジア婦人友好会の50周年記念祝賀会に出

席。

三〇年前の天皇代替わり時の社会をふりかえる



敵の思わぬ攻勢によって始まった天皇

Xデー状況に対応しようと、この「象徴天皇制を考える」学習会は始まった。基本的に本を読む形の学習会である。参加者は一〇名前後、ほぼ同じ顔触れだ。主催者にも参加者にもそれなりに議論は蓄積されていつているが、主催者である僕たちがもめているのはもう少し大きな広がりなので、それを実現するにはど

新聞の縮刷版を図書館で見ればいかと思つたら、縮刷版も図書館から消えていたりする。何でもかんでもネットに持てきやいいつてもんでもないだろうに。報告は基本的には天皇重体報道から始まった一連の自粛騒ぎをエピソード的に紹介していく形をとった。今となつては、もとい当ても、誰が見ても過剰な反応

が連鎖して社会の動きが鈍くなり息が詰まってしまう様子は笑えない冗談である。報告者の僕はしばしば言葉に詰まり、たまたま参加していた(?)天野さんが見かねて助け舟を出し、また参加者の大部分は当時を知る人たちだったのでいろいろと思い出している話がつながっていった。当時からどんだったのか、から現在の例えば眞子の婚約話まで話は広がり、気が付いたら予定の時間はとうに過ぎて終了。

八月は例年通り集会とデモとなつて、次の学習会は一〇月となる。今回は三〇年前の社会をふりかえつたが、一〇月は三〇年前の運動をふりかえる。隔世としか言えないほどに様々な地域で天皇制に反対する様々な運動があった時代を知ること、現在を刺激できればと思っている。そして仲間を増やしていかないことには、来年の戦いなんかとても出来やしないのだ。少数精鋭なんて御免蒙る。つくばの春日交流センターで開催、参加は八名。

(戦時下の現在を考える講座／加藤匡通)

天皇・皇后は、なぜ「人気」があるのか?

六月二五日(月)夜、練馬厚生文化会館で、アキヒト退位・ナルヒト退位問題を考える練馬の会主催の第一回学習会が行われた。三〇名の参加であったが、一二月の結成集会、三月の天皇与那国訪問反対緊急集会とはほぼ同じ人数で、顔ぶれが少しずつ違うのが嬉しい。

講師は、松井隆志さん(武蔵大学社会学部教員)で、天皇・皇后は、なぜ「人気」があるのか?というテーマで一時間ほど話された。まず、二〇一六年「天皇マツセージ」への賛美の事例として、保阪正康『天皇陛下「生前退位」への想い』(毎日新聞社)と片山杜秀・島蘭進『近代天皇論「神聖」か「象徴」か』(集英社新書)を取り上げ、所謂リベラル派と目される保阪や片山や島蘭の、天皇アキヒトの手放しの持ち上げ様を批判した。特に、

片山・島蘭は、「神聖天皇か、象徴天皇か」の二者択一を設定し、安倍改憲を牽制するアキヒト像を作り上げ、「戦後民主主義の防波堤」(島蘭)、「戦後民主主義の大義」(片山)とまで言っている。しかも、一九三九年生の保阪や四八年生の島蘭はともかく、六三年生の片山が天皇を持ち上げている深刻さを指摘された。その背景としては、天皇皇后が、彼ら「文化人」を「私的懇談」のために頻繁に呼んでいることを挙げた。

次に、「天皇・皇后人気」の源流としての所謂「ご成婚」時のニュース映像を観た。この時に、すでにマスコミによって、新憲法と共に歩む「アキヒト・ミチコ」像が演出され、それが現在につながっていることを確認した。

この「天皇・皇后人気」に対峙するためには、評価されている「祈り」「慰め」の裏にあるものを暴露し、丁寧に批判していくことの大切さを強調された。

その後、質疑応答が熱心に行われ、叙勲問題や世代による天皇制の捉え方の違

いなどが取り上げられた。なお、練馬の会では、リーフレット「考えてみよう天皇の退位と即位」を作成した。ご入用の方は、〇九〇一五二〇八八五八〇三池田まで。(同会／中川信明)

3・1朝鮮独立運動100周年キャンペーン 日本と朝鮮半島の関係を問い直す

.....

日本の植民地支配からの独立を求めて朝鮮半島全土で人びとが立ち上がった「三一独立運動」から来年で一〇〇周年を迎える。これを前に、来年三月まで持続的な活動を繰り広げようと六月三日、「キャンドル革命の源流 3・1朝鮮独立運動100周年キャンペーン」のスタート集会が二二〇人余の参加で開催された。

同キャンペーンは、これまで朝鮮半島問題に取り組みながらまったく接点のなかった諸団体が初めて協力し、朝鮮半島問題を軸として、安倍政権による「明治150年キャンペーン」や九条改憲・「戦争のできる国」作りに対峙し、また、四二七板門店宣言、六・一二米朝首脳会談など朝鮮戦争終結・平和体制構築と非核化など、東北アジアの平和への歴史的な動きにも連動していくことを目指している。

六・三〇スタート集会では、はじめに渡辺(日韓ネット共同代表)が主催者あいさつ。続いて趙景達(チョ・キョンドル)千葉大教授が「3・1朝鮮独立運動から100年」が問いかけるもの」と題して

記念講演を行った。

趙さんは、三一独立運動が最初は独立宣言の起草などで知識人らが役割を果たしたが、「独立」の言葉すら知らなかった多くの民衆たちは、生活の実感から立ち上がり、知識人らを乗り超えて二〇〇万人ともいわれる人びとの決起となつていったとその実相を詳しく紹介した。そして三一精神とは「生活主義に立つ民衆の異議申し立て」であり、キャンドル革命に繋がる源流だと指摘した。

続いて、矢野秀喜さん(朝鮮人強制労働被害者補償立法をめざす共同行動)が三月までの取り組みについて提案。①一九一九年→二〇一九年の朝鮮半島の人びとの闘いに学ぶ、②日韓・日朝・日本と東アジアの関係の新たな方向を打ち出す、③三月一日に日本と南北朝鮮を結ぶ市民宣言を目指す――を柱に小集会やスタディツアーなども企画。二二三、二四の検討課題に。

集会はさらに呼びかけ人の高田健さん、渡辺美奈さんが発言、最後に石橋正夫さん(日朝協会会長)の閉会あいさつで締めくくった。

(日韓民衆連帯全国ネットワーク／渡辺健樹)

おしつけないで！ リバティ・デモ

六月三〇日、渋谷ウイメンズプラザと表参道等で、「おしつけないで！リバティ・デモ」が行われた。六時三〇分からの前

段集会と七時二〇分からのデモ行進。前段集会は澤藤統一郎弁護士らの講演「四次訴訟の現段階」と実行委員からの挨拶等、七五名の参加。デモ行進はウィメンズから代々木公園までの約二キロ、四〇分。約八〇名の参加。

デモ行進時に懸念していた右翼による妨害や機動隊が出てきての過剰規制等はなく、歌・シブプレヒコール・アナウンズなどで、「日の丸君が代強制反対」「君が代処分撤回」等を訴えながら賑やかにデモを行うことができた。

このデモは、東京「君が代」処分撤回第四次訴訟の原告有志によって企画された。準備したチラシの呼びかけ文ではこう書いている。〈学校現場では教員だけで

なく生徒への締め付けも強まり、教育の自由が失われています。／2020年東京オリンピックや来年の天皇代替わりに向け、今後「日の丸・君が代」に敬意を払うべきだという圧力がさらに強まっていくのではないのでしょうか。／「国旗・国歌」にどのような考えをもとうと自由であること、「国を愛する」気持ちをおしつけることはできないということ、学校に自由を取り戻したいということを、私たちは主張します。／この思いを広く訴えるために、私たち「君が代」裁判4次訴訟原告有志はデモを企画しました。〉

デモを提案した時点で、原告団内ではデモ実施に消極的な意見もあり、やむなく有志による企画となった。私たちは有志

は、デモすることによって何が得られるのか、なぜデモをする必要があるのか、を説明することの難しさを実感した。説得力のある説明ができるようになることが、今後の課題である。

土曜の夜の華やかな表参道には、多くの人があり、ヤジや罵声を浴びることも覚悟していたが、杞憂に終わった。多くはなかったが、デモに注目し、関心を持つ人もいた。このデモによって何が得られたのか、改めて考えたい。

(同デモ委員会／田中聡史)



6月6日(水) ●安倍靖国参拝違憲訴訟・東京控訴審第二回口頭弁論

6月9日(土) ●止めるぞ！土砂搬入集会
6月10日(日) ●安倍やメロ国会包囲行動
6月15日(金)・6月16日(土) ●第31回政教分離訴訟全国交流集会
6月16日(土) ●問い直す「1968」再考…「叛乱の時代」を
6月17日(日) ●飛ばすな！買うな！オスプレイ！大軍拡・基地強化NO！アクション2018結成集会
6月23日(土) ●連続講座・安倍改憲と憲法9条 第0回「憲法9条をめぐる最新論議」
6月24日(日) ●三十年前の天皇代替わり時の社会をふりかえる(集会の真相参照)
6月25日(月) ●学習会「天皇・皇后」は、

【学習会報告】

鶴見良行『日本の写真 天皇論／写真論 1957-72』

(鶴見良行著作集第一巻『出発』〈みすず書房〉所収)

鶴見良行の、この貴重な「天皇論」の存在を知ったのは、私がかなり若い時であった。しかし、その批判の切り口の鋭さに気づいたのは、かなり後の時間である。レポーターであった私は、松下圭一

たのは何故か？」
鶴見は、こう問いを自ら立てて、それ以下のごとく回答している。
「人間天皇」という言葉およびその視覚的再現の写真があらわれた一九四六年正月頃」の状況。「人間宣言」とマスコミにネーミングされた「元旦の詔書」と、メディアにあふれかえる天皇家の家族写真。そして憲法の「象徴」規定。このプロセスでつながってはいけな問題がつながられることが起きた。「……天皇が人間であるためには当然に戦争に対する公人としての償いが要求されるにもかかわらず、天皇の利用者にのみ追及が向けられ、天皇と国民の結びつきの面における国民の実感の変革をわれわれ国民

の高名な「大衆天皇制」(スター天皇制)論より早く、メディア支配が全面化した政治社会の中の象徴天皇制の戦前から連続する家族主義イデオロギーをベースにした独自の政治的枠割に、キチンと批判の光をあてたこの諸論文の今こそ見過ご

すべきではないある点にしばって報告した。
「国民すべてを戦争においこんだひとつひとつの事態が究極的には天皇というたつた一語の権威によって正当化されたのであったにかかわらず、天皇は何一つ戦争の責任を負いはしなかったという事実と、戦後の天皇は「人間」として国民多数の親愛の対象となっているという事実のつながりの問題」。このつながってはいけな問題が安易につながってしまった

自らが試みようとしなかったために、「天皇は人間である」という事実命題は容易に「人間的な天皇」という価値命題へとすりかえられていったのである」(傍線引用者)。
天皇は人間であるという自明の「事実命題」を素晴らしい「人柄」の天皇という「価値命題」へのスリカエ(操作)があったというのだ。考えてみれば、このスリカエ(操作)は戦後マスコミの天皇報道の日常的作業であり、現在の「生前退位」は人間として当然とのキャンペーンは、その集大成ではないか。
次回のテキストは「アマテラスと天皇——政治シンボルの近代史」(千葉慶・吉川弘文館)。(天野恵一)

なぜ人気があるのか(集会の真相参照)

6月26日(火) ●明治公園オリンピック追
い出しを許さない国賠訴訟第1回口頭
弁論(ネットワーク参照)

6月30日(土) ●3・1朝鮮独立運動
100周年キャンペーン 日本と朝鮮
半島の関係を問い直す(集会の真相参
照)

●おしつけないでーリバティ・デモ 「君
が代」強制と処分をはねかえそう(集会
の真相参照)

7月2日(月) ●辺野古実防衛省行動

法政時報 INFORMATION

開催中〜7月末予定 ●日本人「慰安婦」
の沈黙

13時〜18時(月・火・休日休館) / W
A M・女たちの戦争と平和資料館(地
下鉄早稲田駅ほか) / 連絡先: 同館
(03-3202-4633)

7月12日(木) ●女性と天皇制研究会・
学習会

19時〜 / 文京区民センター3C(地下
鉄春日駅ほか) / 主催: 女性と天皇制
研究会(jutenken@yahoo.co.jp)

7月14日(土) ●再考「1698」・II 政
治的暴力をめぐって

14時30分開場 / ビーブルズ・プラン研
究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 白川
真澄、池田祥子、天野恵一、国富建治、
高橋寿臣 / 主催: ビーブルズ・プラン
研究所(03-6245748)

7月21日(土) ●なぜ元号はいらないの
か?

13時15分〜 / 文京区民センター2A(地
下鉄春日駅ほか) / 坂元ひろ子、中川
信明ほか / 主催: 元号はいらない署名
運動(090-3438-0263)

7月22日(日) ●2020東京オリンピッ
ク知らない!原宿アビール&渋谷デモ
16時〜17時デモ出発 / 原宿駅前・神
宮橋(JR原宿駅ほか) / 主催: 「オ
リンピック災害」おことわり連絡会
(060-50320270)

●シビル連続講座 未来からの透視―ロシ
ア革命百年 第2回

14時〜 / 柴中会公会堂(JR立川駅) /
太田昌国 / 主催: シビル(042-524-9014)

7月23日(月) ●警視庁機動隊沖縄への派
遣は違法 第8回口頭弁論

11時30分開廷・東京地方裁判所103
号法廷(地下鉄霞ヶ関駅)

7月25日(水) ●8月土砂投入ストップ!
首都圏集会

18時〜 / 全水道会館4F(JR水道橋
駅ほか) / 阿部悦子、北上田毅ほか /
主催: 辺野古土砂搬出反対全国連絡協
議会 / 辺野古土砂搬出反対!首都圏ケ
ループ

7月28日(土) ●天皇制について話そう
第二回 天皇は昔は神様、今はアイド
ル?

13時30分〜 / アイーナ701号室(J
R盛岡駅西口) / 桜井大子 / 主催: 岩
手からアジアを考える会(019-666-4666
稲葉)

●原発イヤだー打ち水デモ
18時集合 / 府中公園(予定・京王線府

中駅) / 主催: 原発イヤだー府中(ブ
ログ: <http://nonukefuchuhatenblog.com/>)

7月29日(日) ●「平成」代替わりの政
治を問う・連続講座第6回 反「昭和」
Xデー闘争の(経験)を通して、「平成」
の代替わりを考える Part 2

15時〜 / ビーブルズ・プラン研究
所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 加藤
克子、高橋寿臣、中川信明、天野恵一
/ 主催: ビーブルズ・プラン研究所
(03-6245748)

8月10日(金) ●チフス・アリさんを迎
えて

18時30分〜 / エルおおさか708号
(地下鉄谷町線天満橋駅) / 主催: 靖
国合祀イヤですアジアネットワーク
(fax:06-7777-4925)

8月11日(土) ●平和の灯を!ヤスクニ
の闇へ第13回2018キャンドル行動

13時〜19時デモ出発 / 在日本韓国
YMCAスペースY(JR水道橋駅ほ
か) / 高橋哲哉、吉田裕、権赫泰、内
海愛子 / 主催: 平和の灯を ヤスク
ニの闇へ キャンドル行動実行委員会
(03-3355-2844 四谷総合法律事務所)

8月12日(日) ●金学順さんから始まった
#Me Too

14時〜 / 文京区民センター2A(地下
鉄春日駅ほか) / 川田文子、角田由紀子、
梁澄子 / 主催: 戦時性暴力問題連絡協
議会 / 日本軍「慰安婦」問題解決全国
行動(090-6020-5677)

●日本帝国主義一五〇年を沖縄から問う

14時〜15時デモ / つくば市立吾妻交
流センター(TXつくば駅前) / 湖南
通 / 主催: 戦時下の現在を考える講座
(090-841-1457 加藤)

8月15日(水) ●「明治150年」天皇制
と近代植民地主義を考える8・15行動

14時開場・集会後デモ / 在日本韓国Y
MCA・9F(JR水道橋駅ほか) /
主催: 同実行委員会(03-3380-0263)

8月24日(金) ●学習会 憲法と天皇制
18時30分〜 / 練馬区厚生文化会館(西
武池袋線はか練馬駅) / 清水雅彦 / 主
催: アキヒト退位・ナルヒト即位問題
を考える・練馬の会(090-5208-5803 池
田)

8月28日(火) ●スポーツの軍事化とオ
リンピックの政治

18時15分開場 / 渋谷男女平等・ダイバー
シティセンター(アイリス) (JR渋谷
谷駅) / 井谷聡子、北村小夜 / 共催:
アジア女性資料センター、反五輪の会
(03-3760-5245)

Q.....神田

●作業初参加、オカタイ文章を読むのは
苦手.....(山嵐)

●豪雨地域の方々、お見舞い申し上げます。
暑さも本格的になります。皆さんも
気をつけていきましょう!▼山嵐さん初
参加! 祝歓迎! ビールだビールだ!
本日その他のアニマルは木兔、鰐、蝙蝠、
獺、黒貂でした〜